

最後のデリー・ダーバーはなぜ回避されたのか

——1930年代後半の英領インドをめぐる諸情勢——

本 田 毅 彦

はじめに

ジョージ5世夫妻がインドへ赴き、実施した1911年のインペリアル・ダーバー（新たなイギリス国王が、同時にインド皇帝でもあることを告知するための政治儀礼。デリーで行われたため、デリー・ダーバーとも呼ばれた）は大きな「成功」を取めた、と、少なくともイギリスの支配層には認識されていた¹⁾。その数年後に起こった第一次世界大戦に際して、イギリスがインドから大規模に兵員・物資を調達することができたことについても、同ダーバーの及ぼした効果は大きかった、と考えられる。しかしイギリスは、第一次世界大戦後、インドをはじめとする諸植民地の自立化傾向の高まりを受け、それに対処する必要に迫られた。1911年ダーバーの成功体験がイギリス支配層によって思い起こされ、諸植民地を王族が「訪問」することで、帝国内部の統合が再建されるのでは、と考えられた。かくして、若く、ハンサムな王太子エドワード（1936年1月の即位後は、エドワード8世）への期待が高まり、第一次世界大戦直後の数年間にわたって彼は、インドを含む、世界中に存在するイギリスの諸植民地を訪ねることになった。

その後、1920年代、1930年代前半を通じて英領インド帝国では、帝国政府とインド国民会議派の主導するナショナリズム運動の間で、活発な駆け引きが行われた。1919年インド統治法の施行状況を評価することを目的とするサイモン委員会の設置、インド社会側のそれへの反発と不服従運動の展開、再度のインド統治法改正を目的とする英印円卓会議の実施、1935年インド統治法の策定、などである。

そうした中で、1936年1月20日にジョージ5世が逝去し、エドワード8世が即位したことを受けて、従来通りにインペリアル・ダーバーを実施すべきか否かについて、検討が開始された。その際、インド省／インド政庁の関係者たちが注目したのは、ジョージ5世の晩年において、イギリス国王＝インド皇帝とインド社会の間の「きずな」が改めて確認されたように見えたことだった。1935年のジョージ5世のシルバー・ジュビリー祝典（即位25周年を記念する）に際しては、インド社会を含む、世界中の世論が極めて好意的だった²⁾。ジョージ

1) 本田毅彦「1911年デリー・ダーバーとジョージ五世—国王＝皇帝によるインド社会との対面的コミュニケーションの試み」『史窓』75号、2018年、47-65頁。

2) Kenneth Rose, *King George V* (New York: Alfred A. Knopf, 1983), pp. 394-395; James Pope-Hennessy, *Queen Mary 1867-1953* (New York: Alfred A. Knopf, 1960), pp. 553-555.

最後のデリー・ダーバーはなぜ回避されたのか

5世はシルバー・ジュビリーから半年後に死去したが、その際にインド社会が見せた同情的な姿勢も注目された³⁾。

ところで、イギリスのインド統治に関する最終的な意思決定は、1930年代後半の時点でも、実質的に、ロンドンのインド担当大臣とインド現地のインド副王＝総督の間での、密接で、個人的ですらあった相談の上で行われた。以下では、インペリアル・ダーバーの開催を巡って両者の間で交わされた交信をたどることにより、英領インド帝国のその後の運命に少なくない影響を与えたと考えられる。最後のインペリアル・ダーバーが回避された経緯について、明らかにしたい。

第1章 エドワード8世と、インペリアル・ダーバー

ジョージ5世の逝去を受けて、インド担当大臣ゼトランド侯爵（Lawrence John Lumley Dundas, 2nd Marquess of Zetland）は、インド副王ウィリングドン侯爵（Freeman Freeman-Thomas, 1st Marquess of Willingdon）に宛てた1936年3月2日付の私信で、新国王（エドワード8世）との面会に際して、自分が「コロネーション・ダーバー」の問題を取り上げたこと、それに対して国王は、1921・22年のインド・ツアーの時の苦い記憶（王太子の訪問は、インド国民会議派によってボイコットされた）があるせいで乗り気ではなかったが、自分がインドでの事情の変化を強調したところ、国王は考えてみる、ということになった、と説明している⁴⁾。

1936年4月、インド副王がウィンリソグー侯爵（Victor Hope, 2nd Marquess of Linlithgow）に交代した。1936年半ばの時点で、ゼトランドとリンリソグーは、1937年末から1938年初にかけての冬季が、インペリアル・ダーバーを行うためのチャンスだ、と考えるようになっていた。リンリソグーは、ゼトランドに宛てた1936年6月1日付の私信で、国王の本国でのコロネーションの日程が決まったので、「インドでのロイヤル・ダーバー」について本腰を入れて考えるべきだが、州自治の施行状況がどうなるかわからないので、1937年末時点のインドの政治情勢は予断できない。前例に従うならば、国王は1937年の12月か、1938年の1月に来ることになるだろう、と述べた。またリンリソグーは、ゼトランドに対して、インド訪問にあたっては、国王に空路を用いるように言ってほしい、と述べ、デリーに着陸し、デリーでだけダーバーを行い、十日後には再び空路でイギリスに戻るのがよい、と提案した。そうすれば「ボンベイが[新国王＝皇帝を]歓迎しないかもしれない」という懸念を回避できるだけでなく、空からの国王＝皇帝の到着はドラマチックになるはず

3) Rose, *op. cit.*, p. 404; Pope-Hennessy, *op. cit.*, pp. 557–558.

4) Paragraph of private letter from Lord Zetland to Lord Willingdon, 2nd March 1936, L/PO/5/19/ (iv), India Office Records, British Library. (以下、'India Office Records, British Library' を、'IOR, BL' と略記する。)

だ、と予想していた⁵⁾。

しかし当のエドワード8世は、ほぼ一貫してインペリアル・ダーバーの開催に消極的だった。1936年6月15日付のリンリスゴーに宛てた私信で、ゼトランドは、国王と会ってダーバーについての話題を持ち出したが、国王は全く熱心でなかった、と伝え、次回、国王と面会する際には、国王は間違いなく、インド社会側の受け止め方がどうなるのかについて副王の意見を聞いてくるだろう、と予想している。そして「15年前の経験のせいで、彼はこの点についてセンシティブになっている」と指摘した⁶⁾。

以後、インド省／インド政庁は、国王に対して様々な形でインペリアル・ダーバーのプランを提案し、国王を説得しようとした。ナチスのプロパガンダ映画「意志の勝利」(1934年9月に行われた、ナチスの党大会の様相を記録した映画)の冒頭シーンを転用することを意識しているかのような提案すら、行われている。リンリスゴーに宛てた1936年7月27日付の私信で、ゼトランドは以下のように述べた⁷⁾。

私は、空路でデリーに赴くという案に国王がとびつく、とと思っていたが、そうではなかった。もしも行くのなら、デリー以外へも行きたい、と彼は言っている。そのように私が言ったのはまずかったのだが、他の地域が政治的に動揺していてもデリーは大丈夫だ、と私が言うと、国王はそれにとびつき、閉ざされたデリーでの歓迎など受けたくない、と言った。私は、[ジョージ5世の]シルバー・ジュビリーの際と、前王の死の際のインド社会の反応を考えれば不安はない、と保証した。さらに、空から到着するのはインド人たちの想像力をかき立てるだろう、と言うと、国王は関心を示した。しかし、行くのか行かないのかについては、あいかわらずはっきりとしない。

ジグラー(1990)は、この時点でのエドワード8世とゼトランドのやり取りが、エドワード8世の本意を示していた、と指摘する。国王はインド人たちの自治能力に懐疑的であり、王太子時代には、モンタギュー＝チェルムスフォード改革(州レベルで、インド人たちに一定の自治を認めた)に嫌悪感すら示していた。しかし国王即位時の彼の対インド観は、イギリス政府の閣僚たちの大半に比べれば、よりリベラルなものであり、1936年3月のラジオ放送に際しては、インド社会の人々の「願望(aspirations)」の実現についての一文を挿入しようと試みている。それはインドに自治領の地位を与えることを示唆するものだったため、サー・ジョン・サイモン(当時、第三次ボールドウィン内閣の内務大臣)の説得を受け

5) Extract from private letter from Lord Linlithgow to Lord Zetland, 1st June 1936, L/PO/5/19/(iv), IOR, BL.

6) Extract from private letter from Lord Zetland to Lord Linlithgow, 15th June 1936, L/PO/5/19/(iv), IOR, BL.

7) Extract from private letter from Lord Zetland to Lord Linlithgow, 27th July 1936, L/PO/5/19/(iv), IOR, BL.

最後のデリー・ダーバーはなぜ回避されたのか

で撤回された。ただしジューグラーは、国王のインド問題への関心が心からのものだったわけではない、と付け加えている。インド副王となるのにあたってリンリスゴーが国王を訪ねた際、リンリスゴーは国王に、自分からの報告書を定期的に受け取ることを望むか、と尋ねたが、国王の返事は、「貴兄が書かなければならない時だけでよい」というものだったから、である⁸⁾。

インド省／インド政庁（とりわけ、副王のリンリスゴー）は、ダーバーの実施が不可欠であると判断し、根気強く国王を説得しようとした。これに対して国王は、自分の代理としてヨーク公爵（後のジョージ6世）、あるいはケント公爵（ジョージ5世の四男）をインドへ派遣するのはどうか、と口にする。こうした経緯をゼトランドから伝えられたリンリスゴーは、もしも国王＝皇帝以外の人物がダーバーの主催者になればインド人は深く失望するであろうし、国王＝皇帝という「気高い (august)」存在だけが「無秩序」が発生する危険を回避することを可能にする、と述べ、その旨をゼトランドは国王に伝達した。しかしジューグラー（1990）によれば、「無秩序」という表現が口にされたせいで、国王の「最も暗い疑念」がかえってかき立てられることになった。結局、国王は、もしも誰かがいかなければならないのなら、それは自分だ、ということを決意したが、「リングの内側で、拍手をする兵士たち、警察官たち、官僚たち、そして注意深く選ばれたわずかな数の〔インド人〕公衆とともにバザールを開き、リングの外側には、侮蔑的で腹を立てた群衆がいる、という状態は想定できない」と主張した⁹⁾。

リンリスゴーは、1936年8月10日付のゼトランドに宛てた私信で、「ダーバーについて、国王と面倒な話をしてもらい、申し訳ない」とわびた後、「王族の誰かが、国王の代理 (a Royal Deputy) として行くことはありえず、国王か、副王のダーバーだ、と国王が決心したと聞いて、安心した」と述べている。さらに、「それにしても、ここだけの話のだが、この問題についてまともに取り組もうとしない国王の姿勢には失望させられる」と記していた¹⁰⁾。

他方、インドでは、来るべきインペリアル・ダーバーについての関心が高まりつつあり、1936年9月3日のインド帝国立法参事会で「国王＝皇帝陛下の即位」に関して討論が行われた。議員たちが、ダーバーはいつ行われるのか、経費の算定は行われているのか、インド省との連絡はどうなっているのか、などについて質問したのに対して、副王行政参事会のメンバーであるサー・ヘンリー・クレイク (Sir Henry Craik) が、言質を与えない形で答弁した¹¹⁾。

8) Philip Ziegler, *King Edward VIII: A Biography* (New York: Ballantine Books, 1990), p. 220.

9) *Ibid.*

10) Extract from private letter from Lord Linlithgow to Lord Zetland, 10th August 1936, L/PO/5/19/(iv), IOR, BL.

11) Reference Paper, Record Department (Parliamentary Branch), Transferred to Secretary, Political Department, 9th October 1936, Extract from Official Report of the Legislative Assembly Debates, Date 3rd September 1936, pp. 334 – 335, L/PS/15/86, IOR, BL.

こうした状況を受けて、ダーバー開催の可能性に関してリンリスゴーが作成し、ゼトランドに宛てて1936年9月9日付で送付した覚書は、国王によってダーバーが行われることをインド社会は最も強く望んでいる、と指摘し、その理由は、ムガルたちの伝統、インド社会の人々が信仰する諸宗教が前提としている原理（彼らは、皇帝の即位に際して「人格的な忠誠の誓い (personal homage)」を行うことを望んでいる）だ、と述べていた¹²⁾。同覚書は、ゼトランドが国王の秘書官 (Private Secretary) であるアレック・ハーディング (Alec Hardinge) に宛てて9月30日付で出した書簡に同封される形で、国王に届けられた¹³⁾。

ゼトランドはリンリスゴーに、ハーディングと面会し、リンリスゴーの作成した覚書について彼と意見を交わしたことを、1936年10月13日付の私信で伝えている。ゼトランドの受けた印象では、リンリスゴーの覚書の趣旨をハーディングは高く評価し、この問題について国王にアプローチするための最善のコースを近日中にゼトランドに提案してくれる手筈だった¹⁴⁾。

ゼトランドは、インペリアル・ダーバー問題について話すために10月27日に国王と面会した際、「国王がダーバーを行うべきかどうかについて早期に決断すべき、実践的な理由」と題する文書を持参した。同文書の末尾には「WDC, 10月26日」という署名があり、そして本文 (タイプされている) の上に、ゼトランドが、10月27日の日付入りで、国王が同意した旨を朱筆で書き込んでいる。ただし同文書の内容は、リンリスゴーの作成した9月9日付の覚書に比べると、テクニカルな事情についてだけ述べる、という方針で貫かれていた¹⁵⁾。

1936年10月28日午前にはボールドウィン首相の主宰する閣議が開かれ、その場でゼトランドが、11月3日の議会開会に際しての国王のスピーチに、ダーバーに関する一文 (国王は、「コロネーション・ダーバーを開くために、インドを再訪することが可能になるように望む」) を挿入することを提案した。その一節は、ジョージ5世が1911年2月に行ったスピーチでの言い回しに倣ったものだったが、1911年の際にはなかった藩王たちへの言及があるべきだ、とゼトランドが考えたため、1911年の際には 'Subjects' とされていたのを 'Princes and Peoples' とし、また、国際情勢の不確実性を考慮して、'intention' を 'hope' へ変更していた。ゼトランドはこうした経緯について、10月28日付の電信で、すぐにハーディングに伝えている¹⁶⁾。

11月2日にゼトランドが国王と面談した結果、国王は、議会での自らのスピーチにダー

12) Lord Linlithgow, '[SECRET.], Note by the Viceroy on the question of an Indian Durbar to celebrate His Majesty's accession', 9th September 1936, L/PO/5/19/(iv), IOR, BL.

13) Lord Zetland to Alex Hardinge, 30th September 1936, L/PO/5/19/(iv), IOR, BL.

14) Extract from private letter from Lord Zetland to Lord Linlithgow, 13th October 1936, L/PO/5/19/(iv), IOR, BL.

15) WDC, 'Practical reasons for an early decision as to the King holding a Durbar in India', 26th October 1936, L/PO/5/19/(iv), IOR, BL.

16) Telegram from Secretary of State for India to Viceroy, 28th October 1936, L/PO/5/19/(iv), IOR, BL.

最後のデリー・ダーバーはなぜ回避されたのか

バーに関する一文を入れることによようやく同意した。さらに、リンリスゴーからの覚書の趣旨に基づいて、ロンドンでのコロネーションのあと、なるべく早めにダーバーを行わねばならない、とする点でも両者は合意したが、国王は、ダーバーの具体的な日取りを決めることは回避した。こうした経緯を、ゼトランドは同日付の電信と私信で、やはり時をおかずにリンリスゴーに伝えている¹⁷⁾。

結局、1936年11月3日の議会開会にあたっての国王のスピーチでは、以下のような言明が行われた¹⁸⁾。

It is My hope, when the solemnity of My Coronation has been celebrated, to revisit My Indian Dominions and there to make known, in the same manner as my revered Father, to the Princes and Peoples of India, My succession to the Imperial Crown.

これ以後、インド政庁／インド省の間で、インペリアル・ダーバーの催行を実際に担当する「ダーバー委員会」のメンバーの構成が検討され始めた。リンリスゴーは、サー・マルコム・ヘイリー（Sir Malcolm Hailey）がその委員長になることを強く望み、1936年11月5日付のゼトランドに宛てた電信で、以下のように述べた¹⁹⁾。

国王の訪問の可能性が告知されたので、[イベントの]組織化に入らねばならず、ダーバー委員会を任命しなければならない。1911年ダーバーに際しては、当時、連合州の総督だったヒューイットが、1910年11月に委員長に任命された。彼は二つの職務を1911年4月1日まで同時に行ったが、それ以降は、国王のツアーが終る1912年1月まで、ダーバーに集中した。／私とクレイクは、ヘイリーがダーバーのために戻ってくれるのではないかと、思いついた。ヘイリーの地位は、サービス [インド高等文官制度] の中で疑いのないものであり、そして、たまたま彼は、1911年ダーバー委員会のメンバーでもあった。どの高官との間で困難が生じて、彼ならば対処できる。その上、国王も彼のことをよく知っている。唯一の他の候補はB・J・グランシーだろう。／インドの憲政史のこの時点でダーバーを行うことは非常な政治的重要性を有しており、最大の利益を確保し、最も持続的な印象を得るためにヘイリーの助力が必要だ、と伝えてほしい。

17) Telegram from Secretary of State for India to Viceroy, 2nd November 1936, L/PO/5/19/(iv), IOR, BL; Extract from private letter from Lord Zetland to Lord Linlithgow, 2nd November 1936, L/PO/5/19/(iv), IOR, BL.

18) Telegram from Secretary of State for India to Viceroy, 31st October 1936, L/PO/5/19/(iv), IOR, BL.

19) Telegram from Viceroy to Secretary of State for India, 5th November 1936, L/PO/5/19/(iv), IOR, BL.

リンリスゴーがこれほど高くヘイリーの才腕を評価していたのは、1935年インド統治法が制定された際の経緯があった。当時、リンリスゴーは、イギリス議会にあって同法案を審議する委員会のメンバーだった。難航した同法案の作成プロセスで決定的な「ブレイクスルー」（藩王国をインド連邦に加入させる）を提案したのがヘイリーであり、こうした事情を知悉していたリンリスゴーは、インド統治の将来に大きな影響を及ぼすことになる、と自身がみなしていたインペリアル・ダーバーの催行を、ヘイリーの手に乗ねたい、と考えたのだった。

しかしエドワード8世は、シンプソン夫人と結婚することを理由として1936年12月14日に退位した。これを受けてゼトランドは、同日付のリンリスゴーに宛てた私信で、インペリアル・ダーバー実施の可能性が見通せなくなった、と述べている。他方、この時点でゼトランドは、ダーバーに関する国民会議派の意向をつかもうともしていた。特に、ネルーが、ダーバーをボイコットせよと言い始めているらしいことに不安を抱いていた²⁰⁾。

第2章 ジョージ6世と、インペリアル・ダーバー

エドワード8世の後を継いで即位したジョージ6世は、以下で見えていくように、インペリアル・ダーバーの催行を巡って大きな「振れ」を示した。インド省／インド政庁は、当惑しながらも、それに対応することになる。

インド省／インド政庁は即位直後のジョージ6世に対して、1937年末から1938年初の冬季にインペリアル・ダーバーを行うことを推奨した。1935年インド統治法の施行スケジュールから考えて、それが最良のタイミングだ、と判断していたからだった。ゼトランドは、1936年12月20日付の私信でリンリスゴーに次のように述べている²¹⁾。

私は12月18日（金曜日）に彼〔新国王〕に会い、この件〔ダーバー〕について話した。彼は私に、彼と王妃が、次の冬〔1937年末から1938年初〕に予定されているコロネーション・ダーバーに参加できることを望んでいると公にしてよい、と言った。／彼は、デリー以外へもツアーを行いたがっている。しかし、国際情勢が現下のものであり続けるとすれば、〔国王が〕長く本国から離れることへの反対が強いことも理解している。もちろん彼は、彼の訪問が〔インドで〕どのように受け止められるかを知りたがっている。この点について私は、計画されている訪問に対して潜在的な敵意があることを私に気付かせようとする報せが届いていることを、貴兄に伝えなければならない。

20) Extract from private letter from Lord Zetland to Lord Linlithgow, 14th December 1936, L/PO/5/19/(iv), IOR, BL.

21) Extract from private letter from Lord Zetland to Lord Linlithgow, 20th December 1936, L/PO/5/19/(iv), IOR, BL.

最後のデリー・ダーバーはなぜ回避されたのか

ジョージ6世の即位直後から、イギリス本国の一般レベルでは、インドでダーバーが行われることになり、それに伴って臨時の雇用のチャンスが生じるのでは、との思いが広がっており、インド省にも複数の求職の申し込みが届いていた。たとえば、インドで警察官として勤務し、引退していた人物からの復職の申し込みが、1936年12月半ばの時点で処理されている²²⁾。1937年1月後半には、イギリスに在住するゾロアスター教徒（パルシー）が、ダーバーに関わって国王に奉仕したい、と申し出ていた²³⁾。

即位直後のジョージ6世は、インド訪問に関してそれなりに積極的だった。1936年12月24日の段階では、1937年末から1938年初の冬季にインペリアル・ダーバーを行うためにインドを訪問したい旨を、明確にゼトランドに伝えていた²⁴⁾。従って、ダーバーを行うことがこの時点で正式に決定されていれば、その後の現実の事態の展開とは大きく異なるものになっていた、と考えられる。

しかしジョージ6世は、そのわずか1週間後には消極的になった。12月26日付の電信でリンリスゴーが、「国民会議派の決議が出され、その会期が終了するまでは、ダーバーの実施に関する公示を延期してほしい」とゼトランドに伝えてきたことを知ったから、だった²⁵⁾。結局、国民会議派は、コロネーションに関わる式典に自分たちは一切参加しないが、このことは国王への悪意を意味しない、と決議した²⁶⁾。ゼトランドは、1936年12月31日付のリンリスゴーに宛てた私信で、インペリアル・ダーバーに関する公示を当分見合わせることを国王は望んでいる、と伝えた²⁷⁾。

さらにゼトランドは、1937年1月18日付の私信で、リンリスゴーに対して次のように伝えた。ゼトランドは、直前の週末を王と共にサンドリングムで過ごした首相ボールドウィンと話したが、「王とボールドウィンの双方が、[ロンドンでの]コロネーションの祝祭という、この夏の負担の直後にインド訪問を行うことの[国王の]緊張[strain]を心配している」と²⁸⁾。

22) W.G.N. to E. Russell, 11th December 1936, Delhi Durbar, Applications for Employment, L/PS/15/88, IOR, BL.

23) 'A surprise candidate, Prominent Barnes Resident to Stand as Independent Conservative', *Barnes and Mortlake Herald*, 16th January 1937 (Saturday), Delhi Durbar, Applications for Employment, L/PS/15/88, IOR, BL; Nadir A. Cooper to Under Secretary of State, 19th January 1937, Delhi Durbar, Applications for Employment, L/PS/15/88, IOR, BL; W.G.N., Lieutenant Colonel, Political Aide-de-Camp to the Secretary of State for India, 20th January 1937, Delhi Durbar, Applications for Employment, L/PS/15/88, IOR, BL.

24) Telegram from Secretary of State for India to Viceroy, 24th December 1936, L/PO/5/19/(iii), IOR, BL.

25) Telegram from Viceroy, 26th December 1936, L/PO/5/19/(iii), IOR, BL; Telegram from Secretary of State for India to Viceroy, 1st January 1937, L/PO/5/19/(iii), IOR, BL.

26) Resolution passed by Congress at Faizpur, December 1936, The King's Coronation, L/PO/5/19/(iii), IOR, BL.

27) Telegram from Secretary of State for India to Viceroy, 31st December 1936, L/PO/5/19/(iii), IOR, BL.

28) Sarah Bradford, *King George VI* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1989), p. 208.

1937年1月半ばから2月初旬にかけて、インド省／インド政庁は、1937年末から1938年初の冬季にインペリアル・ダーバーを行わせるべく、ジョージ6世の説得を続けた。しかし、インドでは間もなく、1935年インド統治法に基づいて州議会選挙が行われるが、同選挙では国民会議派が多くの議席を獲得し、幾つかの州で政権を得る可能性があった。ジョージ6世ないしその周辺の人々は、国民会議派が政権を得た州ではダーバーに対する姿勢がより否定的なものになる可能性が高い、と想定するようになっていた。

ただし、1937年1月末に、故ジョージ5世の秘書官だったクライヴ・ウィグラムとゼトランドが話した際には、ウィグラムは、国民会議派からの「敵意」への恐怖がジョージ6世の心理に影響していることを否定し、次のような事情を強調した。「彼〔ジョージ6世〕は、即位直後に、それ〔インペリアル・ダーバー〕を企てることはできないと感じている。彼は自分に押し付けられた使命の重大さに圧倒されており、〔国王としての地位に〕腰を落ち着けるために、より多くの時間が必要だ、とも感じている」と²⁹⁾。さらに、ジョージ6世自身による、1937年2月4日時点でのインド省／インド政庁に対する説明（弁明）は次のようなものだった。「次の冬〔1937年末から1938年初にかけて〕には、〔自分は〕インドへ行かない方がいい。自分は先任者たちのように準備期間が持てなかったので、国王として腰を落ち着けるための時間を必要としており、即位後の1年間はイギリス本国を離れるべきではないと考える。」³⁰⁾

かくして、イギリス／インド両地で、1937年2月9日の同時刻（イギリスでは午前、インドでは午後）に、「インペリアル・ダーバーを延期する」との公式声明が出された。すなわち、「国王は、遺憾の意と共に、次の冬〔1937年末から1938年初〕にインドでダーバーは行えない旨を、インド担当大臣に伝えた。即位の際の特殊な事情から、即位直後の1年間はイギリス本国を離れられない。国王は、後日ダーバーを行うことを期待している」と³¹⁾。

こうした経緯に関して、ブラッドフォード（1989）などの研究が発表される以前は、ジョージ6世の判断は理性的に行われたものであり、その内容も賢明だった、との評価がなされていた³²⁾。たとえば、ジョージ6世の「公認伝記作家（official biographer）」とされるウィラー＝ベネット（1958）は、それが「明確で鋭利な決定だった」と言い、「国王にとって非常な価値を有する資産だった、実際的な常識の感覚、最初にしなければならないことを行う能力」が示された、と記していた³³⁾。

29) Extract from private letter from Lord Linlithgow to Lord Zetland, 31st January 1937, L/PO/5/19/(iii), IOR, BL.

30) Telegram from Secretary of State for India to Viceroy, 4th February 1937, L/PO/5/19/(iii), IOR, BL.

31) 'Communique. Not to be published before the morning of Tuesday, 9th February, 1937. (Simultaneous publication in India has been arranged.)', L/PO/5/19/(iii), IOR, BL.

32) Bradford, *op. cit.*, p. 209.

33) John W. Wheeler-Bennett, *King George VI: His Life and Reign* (London: St. Martins, 1958), p. 302.

これに対してブラッドフォード（1989）は、ゼトランドがリンリスゴーに、イギリス本国の言論機関、少なくとも「高級紙（papers of repute）」は公式の理由が有効だと受け入れたが、ダーバーの延期は国王のメンタルな、また肉体的な健全さについての憶測を増加させただけだった、と述べていたことに注目し、延期の主要な理由が国王の「緊張」への不安だったことは明らかだ、と指摘する³⁴⁾。いずれにしても、これ以降（1937年2月半ば以降）、ダーバーに関するインド省とインド政庁の間での交信は、数カ月間途絶えることになった。

他方、1937年5月12日のジョージ6世の coronation に関わる儀礼に関しては、インドのいずれの州でも「問題なく行われた」³⁵⁾。言うまでもなく、coronation 儀礼の中心は、ロンドンのウェストミンスター寺院で行われる戴冠式だった。フィリップス（2018）によれば、ジョージ6世は、エドワード8世の「日程表」も引き継いでいた³⁶⁾。その中でも最も重要だったのが、本来はエドワード8世の戴冠式を行うはずだった「1937年5月12日」であり、そのまま、ジョージ6世の戴冠式の日とされた。ジョージ6世自身は、それを非常に高いハードルだと考えていたが、何とか「やり遂げた」。

これを受けて1937年後半には、イギリス本国およびイギリスからの文化的影響が強い社会の一般レベル（アメリカ合衆国を含む）では、ロンドンで coronation が行われたのだから、インドでもインペリアル・ダーバーが間もなく行われるだろう、との予測（期待）が再度高まった。たとえば、インドのある出版社が1937年5月24日付で、「イギリス国王が来印し、coronation・ダーバーを行うことを期待している」旨の書簡をインド担当大臣に宛てて送っている³⁷⁾。ダーバーを記念する出版物の刊行機会が生じることを期待していたのであろう。また、元 IMS（Indian Medical Service）のメンバー（医師）で、ロンドンのメイフェアで開業していた人物が1937年5月28日付で、ダーバーに関わって復職を希望する旨の書簡をインド省へ送付した³⁸⁾。カナダ在住の、ある一般女性も、ダーバーの実施予定に関して問い合わせる書簡を1937年6月9日付でインド省へ送付した³⁹⁾。また、当時、トラベラーズチェックを手広く販売していたアメリカンエクスプレス社が、ダーバーの日取りについて問い合わせる書簡を1937年7月5日付でインド省へ送っている⁴⁰⁾。ダーバーを見物するために多くのアメリカ人がインドを訪れることを予測していたのであろう。さらに1937年11月11

34) *Ibid.*

35) Extracts from the Governors' Confidential letters regarding the Coronation Celebrations, Bengal, N.W.F. Province, Orissa, Bombay, UP, Madras, L/PO/5/19/(ii), IOR, BL.

36) Adrian Philips, *The King Who Had to Go: Edward VIII, Mrs Simpson and the Hidden Politics of the Abdication Crisis* (London: Biteback Publishing, 2018), p. 340.

37) Khosla, proprietor of The Imperial Publishing Co., 99, Railway Road, Lahore (N. India), to Lord Zetland, 24th May 1937, L/PO/5/19/(ii), IOR, BL.

38) Sandes, 28th May 1937, Delhi Durbar, Applications for Employment, L/PS/15/88, IOR, BL.

39) W.G.N., Lieutenant Colonel, Political Aide-de-Camp to the Secretary of State for India, to a woman in Canada, 28th June 1937, L/PS/15/86, IOR, BL.

40) W.G.N., Lieutenant Colonel, Political Aide-de-Camp to the Secretary of State for India, to the American Express Company Inc., 8th July 1937, L/PS/15/86, IOR, BL.

日付で、マドラス生れでケントに在住するイギリス人女性が、デリー・ダーバーに関わってセクレタリー職に就けないか、と問い合わせる書簡をインド省へ送付した⁴¹⁾。

しかし肝心のインドでは、インペリアル・ダーバーの延期が1937年2月に公示されて以降、政治情勢が大きく変化していた。1935年インド統治法の規定に従い、同月に州議会議員選挙が行われたが、その結果は、インド省／インド政庁（とりわけ、後者）の予想に反して、国民会議派の「圧勝」だった。同年7月には、国民会議派に属する大臣たちが全11州のなかの7州で誕生した。

これを受けて、インペリアル・ダーバー催行に関するインド省／インド政庁の意欲は大きく低下することになった。リンリスゴーは、1937年8月30日付のゼトランド宛ての私信で「国王のインド訪問が実施されれば、国民会議派の政治家たちが、彼らに与えられるはずの、トラブルを生じさせる機会を利用しようとするだろう」との不安を伝えている。しかしリンリスゴーは、同時に、1938年末から1939年初の冬季にダーバーを行うとすれば、そろそろ検討を再開しなければならない、とも述べていた。ただし「行うとしても、今回のダーバーは小規模にとどめるべきであり、国民会議派の大臣たちが多くの儀礼に参加しようとしないうことを覚悟しなければならない」と付け加えていた⁴²⁾。

しかし、この前後の時点で、ジョージ6世、そして国王自身にもまして王妃エリザベスは、インド訪問に関して、俄然、積極的になっていた。ジョージ6世は、1937年7月時点のインドでの政治状況の変化（州レベルでの、国民会議派の大臣たちの誕生）をむしろポジティブに捉え、それに対して、イギリス人政治家たちの立場とは必ずしも全面的に同一ではない、君主としての立場から、機敏に対応しようとし始めていたのかもしれない。

このような国王の「変化」についてブラッドフォード（1989）は、ロンドンで実施されたコロネーションの「成功」がジョージ6世に「自信を与えた」からだった、と解釈している。すなわち、コロネーションの成功は、新たな国王と王妃に対する「民衆からの熱狂的な支持の大波」を生じさせた。その結果、国王は、おそらく8月末までの時点で、自分の能力、健康に関して自信を深めるに至っていた、と⁴³⁾。

リンリスゴー、ゼトランド、そして国王の秘書官であるハーディングの間で交わされた書簡を見れば、「1938年の冬に国王がインド訪問を行うことの望ましさに関して、インド統治の担当者たちが立場を逆転させており、逆に国王が、本国政府とインド政府の感情に反してでも自分の観点を打ち出そうとする決意を固めつつあった」ことがわかる、とブラッドフォード（1989）は言う。インド統治の担当者たちすべてが、州議会選挙での国民会議派の

41) Jean Patterson to Colonel Neale, C.I.E., India Office, 12th November 1937, Delhi Durbar, Applications for Employment, L/PS/15/88, IOR, BL; WGN to Jean Patterson, 12th November 1937, Delhi Durbar, Applications for Employment, L/PS/15/88, IOR, BL.

42) Extract from private letter from Lord Linlithgow to Lord Zetland, 30th August 1937, L/PO/5/19/(ii), IOR, BL.

43) Bradford, *op. cit.*, pp. 216, 219.

最後のデリー・ダーバーはなぜ回避されたのか

勝利と、同派に属する州政府の大臣たちの誕生を受けて、1921年のエドワード王太子のインド訪問の例を心中に描くようになっていた。すなわち、1921年当時、「ナショナリストの政治家たちは、王太子の訪問が、不人気だったモンタギュー＝チェルムスフォード憲法 [1919年インド統治法] に対する [インド社会からの] 好意を得るための、インド政庁の政治的な策動だと捉え、その結果、[王太子に対して] 敵対的な示威運動を行った」と彼らは理解しており、そうした事態が再現されることを恐れるようになっていた、と⁴⁴⁾。

確かにゼトランドは、1937年9月12日付のリンリスゴー宛ての私信で、1938年末から1939年初の冬季にインペリアル・ダーバーを行うタイミングの「あやうさ」について、言及している。すなわち、「国王のインド訪問と、連邦問題 [1935年インド統治法の規定に基づく、連邦制度の施行] が対置されるのは不都合であり、1921年の状況の再現になってしまいかねない。今回、国王の訪問のタイミングと、藩王たちの連邦への参加の決断に基づく同制度の施行の可能性の高まりが一致したのは偶然なのだが、それが意図的であるとの印象は避けがたい」と⁴⁵⁾。リンリスゴーも、1937年9月22日付のゼトランド宛ての私信で同様の考えを述べていた。すなわち、「連邦の開始とロイヤル・ダーバーを対置することになるのは何としても避けなければならない。国王を政治に巻き込んではいけません」と⁴⁶⁾。つまり、ゼトランド、リンリスゴーは共に、国民会議派の政治家たちが「イギリス側は、州議会選挙の結果によって大きな権力を手にした国民会議派を、いわば別ルートから抑え込むために連邦制度の施行を急いでおり、そのために国王のインド訪問を利用している」と主張することを恐れていたのだった。

こうした状況の中で「神経質になった」リンリスゴーは⁴⁷⁾、1937年9月17日付で、英領インド全州の総督たちに対し、インペリアル・ダーバー開催問題に関する、それぞれの見解の表明を求めた⁴⁸⁾。州総督たちは10月初旬までに返答を寄せており、以下、それらを紹介する⁴⁹⁾。

ボンベイ総督はサー・ロジャー・ラムリー (Sir Roger Lumley) であり、イギリス本国の政界出身の総督だった。ボンベイでは国民会議派が州政府を構成するようになっていた。ラムリーは、今後、インドにおける一般情勢は悪くなるよりは良くなるだろうから、大胆に進むべきだ、と述べ、「左派」が国民会議派にインペリアル・ダーバーへの敵対的姿勢をとらせることになるかもしれないが、このリスクを取るべきだ、と主張した。

ベンガル総督はサー・ジョン・アンダーソン (Sir John Anderson) であり、イギリス本

44) *Ibid.*, p. 219.

45) Extract from private letter from Lord Zetland to Lord Linlithgow, 12th September 1937, L/PO/5/19/(ii), IOR, BL.

46) Extract from private letter from Lord Linlithgow to Lord Zetland, 22nd September 1937, L/PO/5/19/(ii), IOR, BL.

47) Bradford, *op. cit.*, p. 220.

48) Lord Linlithgow, Viceregal Lodge, Simla, to governors of all provinces, 17 September 1937, L/PO/5/19/(ii), IOR, BL.

49) Summary of replies received from governors, L/PO/5/19/(i), IOR, BL.

国政府の官僚出身の総督だった。ベンガルの州政府は非国民会議派政権だった。アンダーソンは、組織的なボイコットが行われる可能性は排除できないが、伝統的な方針に沿ってインペリアル・ダーバーが行われ、インド人の大臣たちに出席を求めないならば、うまくいくだろう、と述べ、こうした方針でのダーバーの催行に自分は強く賛成であり、「ダーバーという考えから逃亡する」のは誤りだ、と主張した。

マドラス総督はアースキン卿 (Lord Erskine) であり、ボンベイ総督のラムリーと同様にイギリス本国の政界出身の総督だった。マドラスでは国民会議派が州政府を構成していた。アースキンは、国際情勢が許すならば、自分はインペリアル・ダーバーの催行に賛成だ、とし、ボイコットや組織的な騒乱は予想できないが、国民会議派の大臣たちがガンディーからダーバーへの出席を許されることはありえそうもない、と述べた。

パンジャブ州総督はサー・ハーバート・エマソン (Sir Herbert Emerson) であり、インド高等文官出身の総督だった。パンジャブの州政府は非国民会議派政権だった。エマソンの考察は以下のようなものである⁵⁰⁾。

[インペリアル・ダーバーが] 延期されても、[国民会議派の] 左派は、それを彼らの勝利とは受け取らないだろう。とりわけ、国王が後日 [インドを] 訪れる、と発表されるならば。しかし [国王のインドへの] 訪問が成功すれば、帝国の絆を掘り崩しつつある、現在の傾向が抑えられるだろう。本当に重要なのは、国民会議派一般と、国民会議派の大臣たちの [インペリアル・ダーバーに対する] 姿勢がどのようなものになるのか、である。国王の [インド] 訪問への彼らの姿勢と、国王が行うダーバーへの彼らの姿勢は異なっているかもしれない。ハルタル [ゼネラルストライキ] や、[国王に対する] 意図的な無礼な態度は生じないかもしれないし、個々の大臣は、もしも国王が諸州を訪問すれば、おそらく国王に陪従するだろう。しかしガンディーは、デリーでのダーバーに国民会議派の大臣たちが陪従することを、その原則から許すことはあり得ない。彼は虚飾や儀礼に反対しているからだ。かくして7州の新政権が代表されないことになり、このことは、国王に対する伝統的な敬意に明らかに有害な効果を及ぼすだろう。従って私は、包括的なデリー・ダーバーそれ自体には反対するが、藩王たち、軍隊、中央立法参事会、中央政府の統治する地域 (デリーとバルチスタン) に限定された形でのデリー・ダーバーには賛成する。しかし、そのようなダーバーに付随させる形で、可能な限り多くの州 (たとえば、ボンベイに加えて、ベンガル、マドラス、連合州、パンジャブ) を国王が短期間訪問し、それぞれの州で簡略な儀式を行うことが不可欠だろう。

連合州総督はサー・ハリー・ヘイグ (Sir Harry Haig) であり、インド高等文官出身の総

50) H.W. Emerson to Lord Linlithgow, 22 September 1937, L/PO/5/19/(ii), IOR, BL.

最後のデリー・ダーバーはなぜ回避されたのか

督だった。連合州では国民会議派が州政府を構成していた。ヘイグは、国王のインド訪問が成功しないならば、それは「本当の災厄である」と言う。彼によれば「論理的に〔国民〕会議派は〔インペリアル・ダーバーに〕欠席するに違いないし、大臣たちはおそらく出席できない」であろう。他方でヘイグは、仮にダーバーが延期されても「深刻な失望は生じない」であろうし、「4、5年後ならば、〔国王のインド〕訪問はよい考えかもしれないが、現在はそうではない、と主張した。

中央州総督はサー・ハイド・ゴワン（Sir Hyde Gowan）であり、インド高等文官出身の総督だった。中央州では国民会議派が州政府を構成していた。ゴワンは、インペリアル・ダーバーが延期されても驚きはなく、国際情勢はダーバー延期の理由として受け入れられるだろう、と述べた。ゴワンの考えでは、ダーバーが成功するかどうかは「現在、7州で政権を握っている〔国民〕会議派の協力にかかって」おり、その理由は、国民会議派の州政府大臣たちが、ダーバーのための「準備と、その宣伝を握ることになるから」だった。ゴワンは、もしも今の段階でダーバー行々の発表が行われれば、国民会議派は確実にそれに反対するだろうが、「今から1年後に決定が行われるならば、事態は異なるかもしれない」と述べた。

アッサム州総督はサー・ロバート・リード（Sir Robert Reid）であり、インド高等文官出身の総督だった。アッサムの州政府は非国民会議派政権だった。リードは、インペリアル・ダーバーが延期となっても「深刻な失望は起こらない」が、1年後であっても国民会議派の考えが変わる可能性は低く、ボイコットの可能性は存在する、と述べた。

北西辺境州総督はサー・ジョージ・カニンガム（Sir George Cunningham）であり、インド高等文官出身の総督だった。北西辺境州では国民会議派が州政府を構成していた。カニンガムは、自分にはインペリアル・ダーバーの催行についての国民会議派の姿勢を予見することができないので、明確な提言は行わない、と述べた。

シンド州総督はサー・ランスロット・グレアム（Sir Lancelot Graham）であり、インド高等文官出身の総督だった。シンドの州政府は非国民会議派政権だった。グレアムは、「本当の意味での即位ダーバー」を行うためのタイミングは既に過ぎてしまった、と指摘する。遅くとも1937年2月の州議会選挙の前に行われるべきだった、という意味であろう。インペリアル・ダーバーを行えば、それがボイコットされ、国民会議派の大臣たちが出席しないリスクが高く、国民会議派は、国王のインド訪問を連邦を進めるための企みだとみなすだろう。逆に、ダーバーを延期しても僅かな失望が生じるだけであり、従って今のタイミングでダーバーを行うことに自分は反対する、と述べた。

ビハール州総督はサー・モーリス・ハレット（Sir Maurice Hallett）であり、インド高等文官出身の総督だった。ビハールでは国民会議派が州政府を構成していた。ハレットの見解は以下のようなものである。

自分は、インド人たちが国王=皇帝の人格へ深い宗教的な敬意を抱いていることは重要な事実であり、それを目の前にして、[国民]会議派はボイコットを企てないだろう、と感じている。さらに、ここ数カ月で状況は改善しており、おそらく今後も、その傾向は続くだろう。／他方、以下のような理由から、ダーバーに対して多くの反対が寄せられる可能性がある。ダーバーは時代錯誤だ、民主主義の時代に藩王たちを主役とし、専制支配を宣伝する儀式だ、連邦を祝い、促進するために行われようとしている、などである。ダーバーが最も簡素に、最も経済的な規模で行われるのなら、これらの反対は最小にとどまるかもしれない。

オリッサ州総督はサー・ジョン・ハバック (Sir John Hubback) であり、インド高等文官出身の総督だった。オリッサでは国民会議派が州政府を構成していた。ハバックは、インペリアル・ダーバーが行われなければ失望が生じるだろう、と言い、それが成功するかどうかはガンディーの姿勢にかかっている、とした。そして、成功からもたらされる利益の大きさを考えれば、失敗のリスクを冒すべきだ、と主張していた。

こうした州総督たちからの返答を目にして、ゼトランドが「総督たちの意見は、わずかながら [インペリアル・ダーバー実施への] 賛成に傾いている」と考えたのに対し、リンリスゴーは、「インド高等文官出身の総督たちが概して反対か、非常にためらいながら賛成している」ことに注目した⁵¹⁾。結局、ゼトランドとリンリスゴーは、1937年10月20日の時点で、1938年末から1939年初の冬季にダーバーは行わない方が良く、との判断に達した。ゼトランドは次のように述べている⁵²⁾。

総督たちからの返答を読んだ後の、貴兄の判断に同意する。今から15カ月後のインドの政治情勢を予見することは不可能なので、国王に対して1938・39年にダーバーを開くことに同意するように勧めるのは、非常に困難である。

さらに、国際情勢を「言い訳」とすることについて、次のように言及していた。

国際情勢は、非常によい言い訳になる。しかし、ダーバーをあきらめた後に [国王が] カナダを訪問することになると、非常にまずい。

ところが、当の国王 (夫妻) はインドを訪問する意志をますます強めていた。同じ日 (1937

51) Extract from private letter from Lord Linlithgow to Lord Zetland, 26th November 1937, L/PO/5/19/(i), IOR, BL.

52) Extract from private letter from Lord Zetland to Lord Linlithgow, 20th October 1937, L/PO/5/19/(ii), IOR, BL.

最後のデリー・ダーバーはなぜ回避されたのか

年10月20日)に行われた閣議で、国王の意を受けたハーディングが、議会開会にあたっての国王の演説の腹案でインド訪問が言及されていないことについて質した。ゼトランドによれば、ハーディングは、こうした省略は「国王がインドへ行くことを望んでいない、という噂に色彩を与えることになるが、国王は、実際には、利益をもってそれを行うことができるとの助言を得れば、すぐにでもインドへ行きたいのだ」と述べた。かくして、リンリスゴーが延期を望む旨を既にゼトランドに伝え、ゼトランドもそれに同意していたのにもかかわらず、首相ネヴィル・チェンバレンは閣議の場でそのような判断を覆し、国王の意向に沿う形で、ハーディングを介して国王が提案した一節を入れることに同意した。

1937年11月1日付のゼトランド宛ての電信で、リンリスゴーが、彼らの間での真意の整理を、再度、以下のように行っている⁵³⁾。

私の意見は、以前と変わらない。国王は、来年、インドを訪問するべきではない。仮に国王が自治領〔ゼトランドは、カナダを念頭においていた〕を訪問することを決めても、である。その理由は以下のとおりだ。藩王たちと〔英領インド〕軍〔の忠誠〕は〔インペリアル・ダーバーを行わなくても〕大丈夫だ。パンジャブとベンガルも大丈夫である。〔国民〕会議派の大臣たちは〔インペリアル・ダーバーに〕参加しないだろう。そして、そのこと〔国民会議派による、インペリアル・ダーバーのボイコット〕が、〔国民会議派の〕宣伝に使われることになってしまう。近時の憲政改革から考えて、〔国民会議派の〕大臣たちが〔インペリアル・ダーバーに〕参加しない状態での開催はありえない。藩王たちと軍にスポットをあてるだけでは不十分だ。国王が到着する際に、連邦問題が関心を集めている可能性が高い。…新憲法体制が落ち着きを見せ、〔国民〕会議派の大臣たちの在任期間が一定の時間を経過し、連邦問題が障害にならなくなるまでは、国王のインド訪問は行われるべきではない。

これに対してゼトランドは、11月15日付の私信で、「我々が同意すれば、国王夫妻はすぐにでもインドを訪問したがっている」とリンリスゴーに伝えた。さらにゼトランドは、国王が内心で望んでいるのは、デリーにおいて、国民会議派の「やっかいな州政府大臣たち」を招く必要のない、主として藩王たち、軍隊、官吏たちのためのダーバーを行うことのように、と言い、パンジャブ州総督のエマソンが提案していた形に近い、とコメントしている⁵⁴⁾。

リンリスゴーは、国王（夫妻）にインド訪問を諦めさせるために、いわば搦手から説得することを思いつく。すなわち、インド政庁はインペリアル・ダーバーのために十分な財源が用意できないことが判明した、との主張である。11月19日、リンリスゴーはゼトランドに対

53) Telegram from Viceroy, 1st November 1937, L/PO/5/19/(ii), IOR, BL.

54) Extract from private letter from Lord Zetland to Lord Linlithgow, 15th November 1937, L/PO/5/19/(ii), IOR, BL.

して電信で、インド政庁の財務担当メンバーであるサー・ジェイムズ・グリッグ (Sir James Grigg) が1938年末から1939年初のダーバーへの支出は難しいと述べている、と伝えた⁵⁵⁾。

さらにリンリスゴーは、11月26日付で、国王 (夫妻) の「心変わり」による事態の新たな展開の重要性を認める私信をゼトランドに送っているが、その文面は、ほとんどあきらめ気味の雰囲気すら漂わせている⁵⁶⁾。

国王夫妻がインド訪問を明らかに強く望んでいることは新たな要素であり、十分に考慮しなければならない、との貴兄の考えに同意する。そして我々が、二つのリスク (国王へのレセプションを、期待されるほどのものにはできないかもしれないこと、そして、[国民] 会議派の大臣たちが、公式に欠席するかもしれないこと) を指摘するのにも関わらず、[バッキンガム] 宮殿が訪問を実施したいと考えるのならば、我々には、もはや言うべきことはない。

そうした心底を隠しながら、リンリスゴーとゼトランドは、ジョージ6世を思いとどまらせるために、インペリアル・ダーバーの経費をまかなうのが難しいのだ、と唱える戦略を展開していく。しかし国王 (夫妻) は頑強だった。

1937年12月5日付のゼトランド宛ての電信で、リンリスゴーは、「ダーバーのための資金」と題して、「慎重を期さねばならない、もう一つの理由が明らかになった。グリッグによれば、インド政庁防衛局の最初の見積もりでは、陸軍部隊のための固定費用が非常に深刻な増加を示している」と告げた⁵⁷⁾。他方、ゼトランドは、その真意を以下のように、リンリスゴーに宛てて12月6日付の私信で書き送った⁵⁸⁾。「私はなお、以下に述べるのが、次の冬に国王がインド訪問を行うのに反対する最強の理由だ、と考える。すなわち、我々が連邦制度の開始に近づいており、1921年にウィンザー公爵 [退位後の、エドワード8世] がインドを訪問した際に [国民] 会議派が非常に効果的に用いた、インド政庁は、その政策を支えるために国王を持ち出しているとの叫びを利用する、との可能性である。」リンリスゴーの本心も、同じだったはずである。

ゼトランドは12月9日に国王と面談し、その際の状況を12月14日付の私信でリンリスゴーに伝えた⁵⁹⁾。

55) Telegram from Viceroy, 19th November 1937, L/PO/5/19/(ii), IOR, BL.

56) Extract from private letter from Lord Linlithgow to Lord Zetland, 26th November 1937, L/PO/5/19/(i), IOR, BL.

57) Not circulated, Telegram from Viceroy dated 5th December 1937, L/PO/5/19/(i), IOR, BL.

58) Extract from private letter from Lord Zetland to Lord Linlithgow, 6th December 1937, L/PO/5/19/(i), IOR, BL.

59) Extract from private letter from Lord Zetland to Lord Linlithgow, 14th December 1937, L/PO/5/19/(i), IOR, BL.

私は、次の冬〔1938年末から1939年初にかけての冬〕にインドを訪問し、ダーバーを行うことに関して、有利な点と不利な点を〔国王に〕話した。私はさらに、この問題についての〔インド現地の〕総督たちの意見の概要も伝えた。国王は強い関心を示しており、個人的には、もしも我々がリスクを取るべきだと考えるのならば、次の冬に訪問することに明らかに賛成である。しかし国王は、それに要する費用についての説明を私から聞いて、ショックを受けた。彼の意見では、説明された費用は全く論外である。

しかし、ゼトランド、リンリスゴーの期待に反して、国王（夫妻）は、規模を縮小してでもインド訪問を行う、という意志を捨てなかった。そうした国王（夫妻）の意志が国王秘書官を通じて告げられたことを、ゼトランドが12月15日付の電信でリンリスゴーに伝えている⁶⁰⁾。

私は、以下のような内容の手紙を、国王の秘書官から受け取った。「国王夫妻は、個人的には、修正された規模でインド訪問を行う意志がある。」

これを受けてリンリスゴーは、経費に関して、より詳細な見積りを出すことを12月16日付の私信でゼトランドに伝えた。しかし、国王の言う通りに規模を縮小すれば確かに経費は抑えられるので、かえって当惑している⁶¹⁾。

再言することになるが、もしも国王がデリーに集中し、諸州への訪問を行わないことにすれば、かなりの節約になる（ただし、諸州からの返答の一般的な調子を考慮すると、〔国民〕会議派の大臣たちが、ダーバーの経費を受け入れるかどうかについて、確信が持てないのだが）。／ただ、一つ明らかなのは、以下の点である。国王の訪問は望ましいが、私的な訪問として行ったり、儀式をかなり省くような形で行ったりすることは不可能である。インドに関して長い経験を持ち、インド人の心理について知見を持つ貴兄であれば理解してくれるだろう。

さらに国王は、言わば「二の矢」を放ってきた。インペリアル・ダーバーに際して英領インド軍部隊の兵士たちに与えることが慣例になっている特別手当を削ればよいのではないかと、ハーディングを通じて国王はゼトランドに12月23日付で提案した⁶²⁾。ハーディングによれば、

60) Telegram from Secretary of State to Viceroy dated 15th December 1937, L/PO/5/19/(i), IOR, BL.

61) Extract from private letter from Lord Linlithgow to Lord Zetland, 16th December 1937, L/PO/5/19/(i), IOR, BL.

62) Hardinge to Lord Zetland, 23rd December 1937, L/PO/5/19/(i), IOR, BL.

国王は「軍隊への特別手当」についての言及に、やや戸惑っている。これは、せいぜいのところ480万ルピーだろう。私〔ハーディング〕の想像するところでは、これらはいわゆる「恩典 (boon)」であり、ダーバー訪問では認められるのが常だった。しかし、このことについて、前の冬にデリーで私が副王と話をしたときには、この慣行が時代遅れになっていると副王は考えていたようであり、私もそうした考えに全く同意した。一つの方法としては、軍隊だけに恩典を与えるのではなく、インド全土の、なるべく多くの大規模な中心地で貧民たちに食糧を与えるべきであり、そのコストはおそらく数十万ルピーだろう。

年が改まった1938年1月4日付で、インド政庁（担当者はJ・ギルバート・レイスウェイト, J. Gilbert Laithwaite）からインド省（担当者はマイルズ・クロウソン, Miles Clauson）へ、最小規模で国王のインド訪問を行う際の経費についての詳細な見積りが送られた⁶³⁾。

国王のインド訪問に要する経費について、インド政庁財務局局長（Finance Secretary）のニクソンが作成した同封のノートを送るよう、インド副王が私に求めた。／副王は私に、可能な限り信頼できる見積りを作成するために、財務局が〔英領インド軍〕総司令官および〔インド政庁〕内務局と相談の上で最大限の努力を払った、と〔貴兄に〕伝えることを望んでいる。／国王の尊厳を維持することと両立させる形で、可能な限り、すべての節約を行うことが重視されるべきだろう。

また、リンリスゴーは、兵士たちへの「恩典」の取りやめに関する国王からの提案に対応するべく、1月10日付の電信で、「やはり、ダーバーに際しては軍隊に対して特別の恩典を与えなければならない」と自分が考え直すに至った理由について、苦しい説明をゼトランドに対して行っている⁶⁴⁾。

昨年、ハーディングと私が交わした会話の中で、私が〔インペリアル・ダーバーに際しての〕兵士たちへの恩典の供与は時代遅れだ、という考えを語ったのは、全くそのとおりである。しかし私は、…〔英領インド軍〕総司令官との間では、このことについて相談していなかった。総司令官の意見は、彼自身の言葉を借りるとすれば、以下のとおりである。「もしも他の考慮すべき点を見捨てることのできるのなら、恩典の供与を控えることになっても、兵士たちの規律と士気に影響が及ぶことはないだろう。しかし私が熟考するところでは、以下の理由から、一定の恩典を与えることが望ましい。第一に、先例という要因である。第二に、インドではこうした機会には恩典が期待される、という理由である。

63) Estimate of the cost of a royal visit to India, L/PO/5/19/(i), IOR, BL; J. Gilbert Laithwaite, Calcutta, to Miles Clauson, India Office, 4th January 1938, L/PO/5/19/(i), IOR, BL.

64) Not circulated, Telegram from Viceroy, 5th January 1938, L/PO/5/19/(i), IOR, BL.

第三に、それを控えることが、悪意を持つ人物たちに兵士たちの忠誠心を動揺させるための更なる機会を与えることになり、そうした人物たちはそれを見逃すことはないだろうから、である。」グリッグ [インド政庁の財務担当メンバー] もまた、総司令官の主張の説得力を受け入れている。貴兄には理解していただけるように、この問題について私は、私個人の明確な考えをもって臨んでいたが、責任ある立場の軍当局者の熟考した意見を聞いて考えを改めた。そして、こうした性質の事柄については、総司令官の判断や助言に最大の重みが与えられなければならないことは明らかである。

インド政庁から送られた見積りに目を通したゼトランドは、それに基づくインド政庁の提言に同意する旨、1月17日付の私信でリンリスゴーに伝えた⁶⁵⁾。

私は、貴兄が送ってくれた1938・39年の予算の見積もりを検討した。これらの文書を読み込んだ上での [私の] 結論は、次の冬に国王がインドを訪問することは無理だ、というものである。インドには金がなく、新たな課税を行うか、借り入れを行うことによるのみ調達できる。新たな課税を行うのが論外なのは明白であり、借金に基づいて国王の訪問を行うことへの反発は、真剣に考えるにはあまりにも大きいと思われる。私は、それをハーディングに率直に告げ、必要であれば国王にも直接言うつもりである。

しかし、インド訪問をめぐる「戦い」の最終局面においてさえ、国王は、ゼトランドおよびリンリスゴーとの間で「断固たる後衛戦」を行う決意であることを示し、ゼトランドはそれに「驚き、当惑する」ことになる⁶⁶⁾。

1938年2月1日、ゼトランドは国王に面会し、主として経費とインド政庁の予算の状態から、1938年末から1939年初の冬季にインドを訪問するべきではない、と助言した。翌日の閣議でゼトランドは、国王は自分の説明に同意し、更なる延期を公示するための文面を考えてほしいと自分に依頼した、と報告した。これを受けて内閣は、国王の同意に基づいて、そのような趣旨の公示を準備するようにゼトランドに依頼した。

他方、リンリスゴーは、2月4日付の私信で、資金調達の難しさが国王を説得するためだけでなく、インド社会の「世論」の多くを納得させる理屈としても都合が良いのだ、との胸中をゼトランドに書き送っている⁶⁷⁾。

もしも国王が [インド訪問を] 延期すると決定すれば、それは単純に延期の問題なのであ

65) Extract from private letter from Lord Zetland to Lord Linlithgow, 17th January 1938, L/PO/5/19/(i), IOR, BL.

66) Bradford, *op. cit.*, p. 221.

67) Extract from private letter from Lord Linlithgow to Lord Zetland, 4th February 1938, L/PO/5/19/(i), IOR, BL.

り、資金を調達することができれば国王と王妃はインド訪問を期待することになる、ということをお我々は強調しなければならない。／[インドの] いずれの重要な中心地の新聞も[国王のインド訪問についての] 関心の兆候は示してはおらず、實際上、何らのコメントも出していない。こうした事態の説明は、過去においてあまりにも多くの噂と、それを否定する噂が出回ったので、何かポジティブな事柄が出てきたと思えるようになるまでは熱意を貯めておこうと人々がしている、ということなのだろう。しかしそれにもかかわらず、関心がないということでは全くない。

しかし、これがこの終わりではなかった。1938年2月4日から2月7日にかけて、インド省／インド政庁は、国王の、何としてでも1938年末から1939年初の冬季にインド訪問を行いたい、との希望を、際どく阻んだ。チェンバレン首相はこうした経緯に不審を抱き、ゼトランドに問い合わせた。ゼトランドは、渋々、チェンバレンに対して、国王にインド訪問を行わせたくない真の理由が、連邦制度にむけての手続きの開始と、国王のインド訪問が重なり、そのせいでインドにおいて政治的アジテーションが生じることを自分たちが恐れているせいなのだ、と明かした。この間の事情を、ゼトランドは2月7日付の私信でリンリスゴーに伝えている⁶⁸⁾。

インド訪問に関して国王から最終的な決断を引き出すのは、異様なまでに困難だった。／国王は、私が彼に提起した助言を受け入れ、次の冬[1938年末から1939年初]に訪問を行うのは実際的ではないとの決定を下したが、大変な残念がりようだった。／国王は再考し、もしも訪問を行うことを妨げる主要な障害が財政上の困難であるのならば、資金を得るために、彼が[イギリス本国政府の]財務大臣を説得しよう、との考えすら抱いたようだった。…するとネヴィル[チェンバレン首相]が、財政上の困難だけが、次の冬に訪問を行う上での唯一の深刻な障害なのか、と私に問い合わせてきた。私は彼に対して、そうではなく、それについて私が公には言及しにくい、同様に深刻な障害があり、それは、インドでは次の冬に1935年インド統治法の条文に基づいて連邦に関する規定が施行されることとの関連で、かなりの政治的アジテーションが起こるリスクがあるということだ、と答えた。ネヴィルは、そういうことであるのならば、自分は、我々の結論を最終的なものとして受け入れ、その旨を国王に伝える、と述べた。

他方、国王は、ゼトランドおよびリンリスゴーとの「戦闘には敗れたものの、なお戦争には敗れていない」ことを示そうとするかのように、今回のインド訪問の「延期は、文字通り延期を意味する」と明示することにこだわった。すなわち国王は、ゼトランドが総理大臣と

68) Extract from private letter from Lord Zetland to Lord Linlithgow, 7th February 1938, L/PO/5/19/(i), IOR, BL.

最後のデリー・ダーバーはなぜ回避されたのか

相談した後に作成した宣言文の草案に対して、幾つかの変更を加えることを要求した。その結果、宣言文の最後の段落は、国王がインド訪問計画を決して放棄していないことを強調するものになった⁶⁹⁾。

ただし、皮肉にも言うべきか、その後の事態の推移は、インド社会（の少なくとも政治的に鋭敏な部分）が、もはや国王のインド訪問に、さして関心を抱いていないことを明らかにした。リンリスゴーは、1938年2月18日付のゼトランド宛ての私信で、安堵と一定の失望を交えて、以下のように述べている⁷⁰⁾。

以前、貴兄に宛てて出した書簡の中で、[インドでは] 国王のインド訪問に関して驚くべき程にわずかな関心しか示されていないことに言及したが、そのことは、延期の決定が行われた後にさえ、ある程度あてはまる。

イギリス人たちが、その帰趨を最も気に病んでいた第51回インド国民会議が、1938年2月19日から22日にかけてボンベイ管区スラト県のハリプラ（Haripura）で行われ、その際の議長はスバス・チャンドラ・ボースだった⁷¹⁾。同会議では、国民会議派と藩王国の民衆との関係について以下のような動議が提案され、可決された⁷²⁾。

イギリス帝国主義は、新憲法 [1935年インド統治法] 中の連邦制度に関する部分を導入するために最後の計画を遂行しており、その下では、連邦政府の全議席のうち三分の一が専制的な藩王たちのために留保され、藩王国の臣民たちの民主主義的な権利は完全に否定される。…諸藩王国の7千万人の民衆は、イギリス帝国主義と、その同盟者である専制的な藩王たちからの解放を目指す共通の戦いにおいて、[イギリスの直接支配下にある] インド人民衆の同盟者として国民会議派の列に加わらなければならない。

しかし、インペリアル・ダーバー「延期」の決定は、ハリプラでの国民会議では無視された。

こうした状態へのゼトランドの反応は、1938年2月20/21日付のリンリスゴー宛ての私信で示されている⁷³⁾。

結局、我々が合意に達して行われることになった、国王のインド訪問の延期を明らかにす

69) Bradford, *op. cit.*, pp. 222–223.

70) Extract from private letter from Lord Linlithgow to Lord Zetland, 18th February 1938, L/PO/5/19/(i), IOR, BL.

71) 旧ボンベイ管区のバルドリ県にあり、スラト市に近い。

72) Ben Bradley, 'The Haripura Session', *Labour Monthly*, April 1938, No. 4.

73) Extract from private letter from Lord Zetland to Lord Linlithgow, 20th/21st February 1938, L/PO/5/19/(i), IOR, BL.

るための告示は、当地〔イギリス〕では好意的に報道された。また、私が判断できる限りでは、インドでの受け止められ方も全く満足できるものである。

ゼトランドは、インペリアル・ダーバー延期に対するインド社会でのメディアの反応について、1938年3月1日付のハーディング宛ての書簡を介して、国王に以下のように説明している⁷⁴⁾。

彼〔リンリスゴー〕によれば、〔インドの〕プレス全体に拡がっている、非常に明らかな傾向は、国王が〔インド〕訪問を行うのに適当なタイミングは、インドが他の自治領と同じ基盤に立って国王を迎えることができるようになった時だ、というものである。しかし私が考えるところでは、このような調子で書く者たちが心中で考えているのは、連邦制度問題が片付いた後で、ということだろう。…国王訪問が延期された理由が、〔インドで〕これほどまでに広く称えられていると感じられることは、延期への自然な失望感を少なくとも和らげるものではある。

こうした説明への国王からのコメントを、ハーディングが1938年3月3日付でゼトランドに伝えた⁷⁵⁾。

国王は副王から〔既に、書簡で〕直接に説明を受けていたが、訪問を延期するとの決定がインドで支持され、そのような決定を基礎づけた理由が、〔インド政界の〕最も左翼的な部分でも評価されているということをお貴兄が確認してくれたことについて、感謝している。／しかし国王は、彼の訪問を、インドが自治領の地位を得るまで延期したいとは思っていない。というのも彼は、そのようにすれば、少なくとも自分が年老いてしまうことを意味する、と感じているからだ！

結局、国王のインド訪問は実現しなかったが、他方で国王夫妻は、インド訪問が行われていたかもしれないはずの、1938年末から1939年初にかけての冬の直後に、すなわち、1939年5・6月に、カナダとアメリカ合衆国への訪問を行っていた。

結びに代えて

本稿で確認してきたように、最後のインペリアル・ダーバーは1930年代後半に行われていても不自然ではなかったし、それをタイミングよく行う機会が失われたのは、主として、主

74) Lord Zetland to Alexander Hardinge, 1st March 1938, L/PO/5/19/(i), IOR, BL.

75) Alexander Hardinge to Lord Zetland, 3rd March 1938, L/PO/5/19/(i), IOR, BL.

最後のデリー・ダーバーはなぜ回避されたのか

役であるはずのイギリス国王＝インド皇帝たちの個人的な事情によっていた、と考えてよいであろう。

他方、過去のインペリアル・ダーバーで国王＝皇帝と並んで「もう一方の主役」を務めてきた藩王たちは、1930年代後半において、言わば彼らのためにも、1935年インド統治法により連邦制度が準備されたのにもかかわらず、結局、それに加わろうとせず、英領インド帝国の連邦化を実現させなかった。連邦スキームへの参加は、インド社会における有力な政治的存在として藩王たちが生き延びるための合理的な選択だったと考えられるが、ラムザック(1978)によれば、主として藩王たちの間での内部対立のために実現しなかった⁷⁶⁾。

しかし、仮に最後のインペリアル・ダーバーが行われていれば、それにともなって「インド連邦」のイメージが具体化し、藩王たちもそれに加わることを選択した可能性は高かったように思われる。そうであったとすれば、藩王たちのその後の政治的運命は、おそらく大きく異なるものになっていたであろう。

当のジョージ6世は、第二次世界大戦末期、連合軍のイタリアとノルマンディーへの上陸作戦が成功し、ヨーロッパ戦線での連合軍の勝利がほぼ確実になった後、インドの「忘れられた軍隊 (Forgotten Army)」（アジア戦域の帰趨へのイギリス世論の関心の低さから、同戦域で戦うイギリス軍部隊は、イギリス国内でこのように呼ばれていた）と、東南アジア戦域最高指揮官になっていた、又従兄弟の関係にあるマウントバッテンを訪ねようとした。国王＝皇帝は、アジアで日本軍と戦うイギリス軍・英領インド軍兵士たちの「不遇感」をマウントバッテンから伝えられており、また、日本軍への反攻作戦の開始を幾度も提案しながら、イギリス本国政府の反対によってそれを阻まれていたマウントバッテンの失望感にも同情していた⁷⁷⁾。

興味深いことにジョージ6世は、自分がインドを訪問すれば、日本軍との大規模な戦闘を控える第14軍（多国籍軍だったが、その主力は英領インド軍兵士たちだった）の士気が大いに高まるはずだと確信しており、その旨を1944年11月7日付でチャーチルに宛てて書いていた⁷⁸⁾。言い換えれば、国王＝皇帝は、インド社会における自身のカリスマをいまだに信じていた、ということになる。しかしチャーチルは「アメリカ人たちの目の中でのインドのセンチティヴィティと、インドにおける政治的な期待感を極端に意識していたために、国王＝皇帝の訪問によって生じる結果に対処する準備ができていなかった」。ジョージ6世は、戦争の最後の舞台において、国王＝皇帝のために（も）日本軍部隊と戦う「彼の兵士たち」を訪問したいとの望みを妨げられたことに強い憤りを示した。本来、こうした案件を主管するはずのインド担当大臣レオ・アメリーは全く報告を受けておらず、国王と会見して初めて事の

76) Barbara N. Ramusack, *The Princes of India In the Twilight of Empire: Dissolution of a Patron-Client System, 1914-1939* (Columbus: Ohio State University Press, 1978), pp. 241-243.

77) Bradford, *op. cit.*, p. 365.

78) *Ibid.*

顛末を知った。アメリーは「私に相談なしでこのようにしたのは、いかにもウィンストン [チャーチル] 的である。…個人的には、私は [ジョージ 6 世のインド訪問に] 強く反対はしなかっただろう」と、その日記の1945年3月20日の項に記した⁷⁹⁾。

いずれにしても、1945年5月3日、第14軍はランゲーンを日本軍の手から奪還することに成功した。

79) *Ibid.*